



響け！市民のハーモニー

文化芸術にふれあう機会として開催された「小江戸川越 第九演奏会」。2月27日(日)、市民による合唱団が加わった演奏会の幕が上がりました。

合唱団の練習が始まったのは、昨年の12月。団員は、主婦や会社員、俳優を目指す若者など、年齢もさまざまなお人々がいます。約百五十人が、やまがき会館を主たる練習会場に、週一度のペースで練習を重ねてきました。

ソプラノ、アルト指導の池口敬子さんは「合唱は一人の声が良いだけではだめ。大切なのは調和」。



「第九はリズムが複雑で難しい曲。歌う表情も大切ですよ」と話すのは、テノール、バス指導の廣重雅己さん。練習でピアノ伴奏をした仲千菜美さんは「次第に自信がついて、楽しく歌っているのが、伝わって来ました」。各パートはフィナーレを歓喜で迎えるべく、四つの歌声を一つに調和させていきます。

川越フィルハーモニー管弦楽団の有志を中心に結成したオーケストラとの合同練習

をしるのは、直前の2月に入ってから。短い時間で、歌声と演奏を一つに合わせさせていきます。本番が近づくと緊張感も加わり、練習にますます熱が入ります。



時間があれば発声練習。慣れないドイツ語の発音に苦労した日々。楽譜を何度も読み返し、家事や仕事を終え、寒い中、練習に駆けつけられた人々。経験者が初心者を上手にリードして、みるみる上達。練習熱心で、情感豊かな団員は、三か月間、苦しみながらも、楽しく歌い続けました。

本番当日、会場の市民会館には、およそ八百五十人の聴衆が集まりました。午後2時、幕が上がって演奏が始まります。いよいよ第四楽章。第九を高らかに歌う市民合唱団のハーモニーが、ホールに響きわたりました。

本番当日、会場の市民会館には、およそ八百五十人の聴衆が集まりました。午後2時、幕が上がって演奏が始まります。いよいよ第四楽章。第九を高らかに歌う市民合唱団のハーモニーが、ホールに響きわたりました。



指揮者・小高秀一さん

「団員の半数近くが初心者とは思えない、良い合唱でした。一生懸命に練習に取り組んだ成果の表れですね。川越に音楽文化を根付かせるには、こうした催しを継続することが大切です。」



コンサートマスター・水山裕夫さん(東京都交響楽団)

「合唱団の歌声は感動的で、演奏が終わったときは感無量でした。オーケストラは、昨年の夏から準備を始め、お互い気心が知れた者同士のようにでした。良い雰囲気、演奏ができました。」

歌った感想

「合唱は初めてで、不安でした。終わってほっとしています」(中込裕子さん・ソプラノ・30歳・郭町二丁目) 「気持ち良かったです。次に機会があれば出たいです」(加藤紀子さん・アルト・59歳・石原町一丁目) 「フランス出身なので、ドイツ語は外国語。通勤の度に聴いて覚えめました」(シュバリエミツシエルさん・テノール・58歳・吉田) 「第九は、喜多院の舞台上に次ぎ二回目。川越が音楽あふれる街になるといいですね」(小野沢康夫さん・バス・71歳・砂新田)

聴いた感想

「歌声がきれいで感動しました。毎年演奏会が続けられることを期待しています」(志村千枝子さん・70歳・三久保町) 「みんなの声が大きくてすごかった。お母さんが舞台上に立っているのを見て、次は出たくありません」(伊藤俊くん・9歳・南通町)

市村正親さんトークショー



NHK 大河ドラマ「江～姫たちの戦国～」で明智光秀を演じた川越出身の俳優・市村正親さんのトークショーが2月9日、やまぶき会館で行われました。ゲスト出演した「江」制作統括・屋敷陽太郎さんが、ドラマの見どころや制作現場の様子、いつも前向きに取り組む市村さんの魅力を紹介しました。

撮影中のこぼれ話や子供のころの思い出を笑顔で語る市村さん。「これからも川越のためにお手伝いしたい」と話すと、盛り上がる満席の会場から、大きな拍手が送られました。



世界をリードする秘訣

市立東中学校の創立50周年記念式典が2月19日に行われました。

講演した東京工業大学教授・細野秀雄さん(57歳)は、昭和44年に同校を卒業。現在は、電気を通すセメントや透明アモルファス酸化物半導体の開発、鉄系高温超伝導物質の発見などで世界をリードする科学者です。

細野さんは、会場の生徒や参加者およそ800人に向け、何度失敗してもそこから得られるものはある、「オール・オア・ナッシング」ではなく「オール・オア・サムシング」と語りました。3年生の三上貴也くんは、「研究者になるための4条件の1つ、自分の独自の考えを強く主張できる“生意気であること”が気に入りました。将来は、歴史研究の道に進みたい」と話してくれました。



ひま
ち

ふ
お
と
こ
じ
ゆ
ー
す

ひま
ち

行って 会って 体験
気になるイベントや人を紹介

小江戸あるき

ひま
ち

かわごえカフェで知恵集め

かわごえ環境ネットの設立十周年記念事業が、2月19日に開催されました。活動成果の発表後に行われたのは、カフェでくつろぐように、喫茶と音楽を楽しむながら、考えを共有する「す

みたい街 かわごえカフェ」。これは、たくさんの方が、考えを効果的に共有するための新たな手法を体験してもらうものです。会場となった、東洋大学川越キャンパス(鯨井)には、およそ百人が集まりました。

話し合いのテーマは「こんな街に住みたい」。一つのテーブルに四人が座り、模造紙に意見などを書き込みながら、三十分ずつ三回に分けて話し合いが行われます。まず、①環境、福祉、観光、教育、安全のいずれかの視点で、自由に対話します。②



次に一人を残してほかの人は移動。新たな顔ぶれで、前のテーブルでの内容を紹介し合

います。③得られた考えや知恵を、最初のテーブルへ持ち帰ります。

移動する参加者は、まるで蜜を求めて飛びまわる蝶のように、いろいろな意見や考え方を「他花受粉」します。



参加者の最首洲子さん(73歳・小堤)は、「四人くらいが、ちょうど話しやすい人数ですね。それなのに、たくさんの方と話したように、いろいろな考えを聞きました」。主催したかわごえ環境ネット理事長・小瀬博之さん(40歳・鯨井)は、「環境の問題は、生活の身近なところにあります。こうした手法が新しい“気づき”につながればいいですね」。

この方法は、参加者全員が話し合ったような効果が得られ、大人数で会議をしたように、考えを共有することができます。